

京都市 山科区

中 臣 遺 跡 第 93 次発掘調査報告書

2 0 2 0

有限会社 京都平安文化財

例 言

1. 本書は、京都市山科区勸修寺東栗栖野町 77-5,77-6・柳辻番所ヶ口町 731-1,32-2 における宅地造成に伴う発掘報告書である。【文化財保護課受付番号 18N438】
2. 本調査は、根本建設工業株式会社の委託により有限会社 京都平安文化財が実施した。
3. 発掘調査の面積は、175㎡である。
4. 発掘調査は令和元年 7 月 29 日から同年 9 月 4 日まで実施した。
整理・報告書作成は令和元年 9 月 9 日から同年 10 月 30 日まで実施した。
5. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制で行なった。

指 導 機 関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
調 査 主 体	有限会社 京都平安文化財（代表取締役 栗田 尚典）
調 査 員	中村 吉孝、小森 俊寛（補佐）
作 業 員	有限会社 京都平安文化財、株式会社 明輝建設
測量・図化	浅川 永子、小林 雅幸、田中 侑
遺物実測	川端 玲子
6. 調査検証委員会として下記の方々のご指導を頂いた。（五十音順、敬称略）

京都外国語大学外国学部英米語学科教授	南 博史
同志社女子大学現代社会学部システム学科教授	山田 邦和
7. 本書の構成と編集の基本は中村、編集実務は中村が中心となり、小林が補佐した。
8. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を中村・小林、遺物写真を小森が撮影した。
9. 本書の執筆は、第 1～3 章は中村、第 4 章は小森、第 5 章は中村が担当した。
10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。（五十音順、敬称略）
泉拓良、植山茂、菅田薫

凡 例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点はT.P 値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P」と略称している。
2. 地図は京都市都市計画局発行の 1:2,500「勸修寺」を使用し編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
4. 遺構図は各図にスケールを掲載し、平面図は縮尺を 150 分の 1、断面図は縮尺を 100 分の 1、個別図は縮尺を 100 分の 1 で掲載している。一部図面については復元線を図示している。
5. 遺構名は土坑、溝、などと表記し、遺構の種類別に一連の通し番号を付加した。建物については遺構とは別の番号を付加した。
6. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。遺物の掲載番号は実測番号と同じにしている。
7. 遺物番号は各図ごとに通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
8. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ拡大、縮小した。
9. 本書に収録した図資料などの引用、参考文献、索引は、第 2 章章末に【参考文献】として掲載した。



本文目次

例 言 ・ 凡 例

第 1 章	調査の経緯と経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	発掘調査の経過	2
3.	調査日誌抄	2
第 2 章	位置と環境	4
1.	地理と歴史的環境	4
2.	既往の調査	7
(1)	中臣遺跡の既往調査概括	7
(2)	調査地近接地域の既調査	8
第 3 章	調査成果	11
1.	基本層序	11
(1)	遺構面概要	11
(2)	基本層序	11
2.	遺 構	14
第 4 章	遺 物	18
第 5 章	まとめ	22

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	調査地位置図	1	第 8 図	遺構平面図	13
第 2 図	山城国宇治郡と関連主要遺跡		第 9 図	建物 1 平・断面図	14
	平面概念図	4	第 10 図	建物 2 平・断面図	15
第 3 図	山科区・伏見区東端部・宇治市		第 11 図	建物 3 平・断面図	15
	関連主要遺跡略位置図	5	第 12 図	建物 4 平・断面図	16
第 4 図	中臣遺跡概要図	7	第 13 図	溝 2 平・断面図	17
第 5 図	調査地近辺地の既往調査地位置図	9	第 14 図	縄文土器 実測図	19
第 6 図	基本層序概念図	11	第 15 図	弥生土器 実測図	19
第 7 図	調査区土層断面図	12	第 16 図	土師器・須恵器 実測図	20

表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表	21
-------	---------	----

写真目次

写真 1	調査前風景（段丘崖か）南東から	2	写真 5	第 2 調査区遺構検出状況 西から	3
写真 2	機械掘削 北東から	2	写真 6	建物 3 検出状況 西から	3
写真 3	第 1 調査区段丘崖（上段～下段）		写真 7	建物 3 掘り下げ状況 西から	3
	南東から	2	写真 8	近隣向け現地説明会風景 南西から	3
写真 4	調査区全景 南東から	3			

図版目次

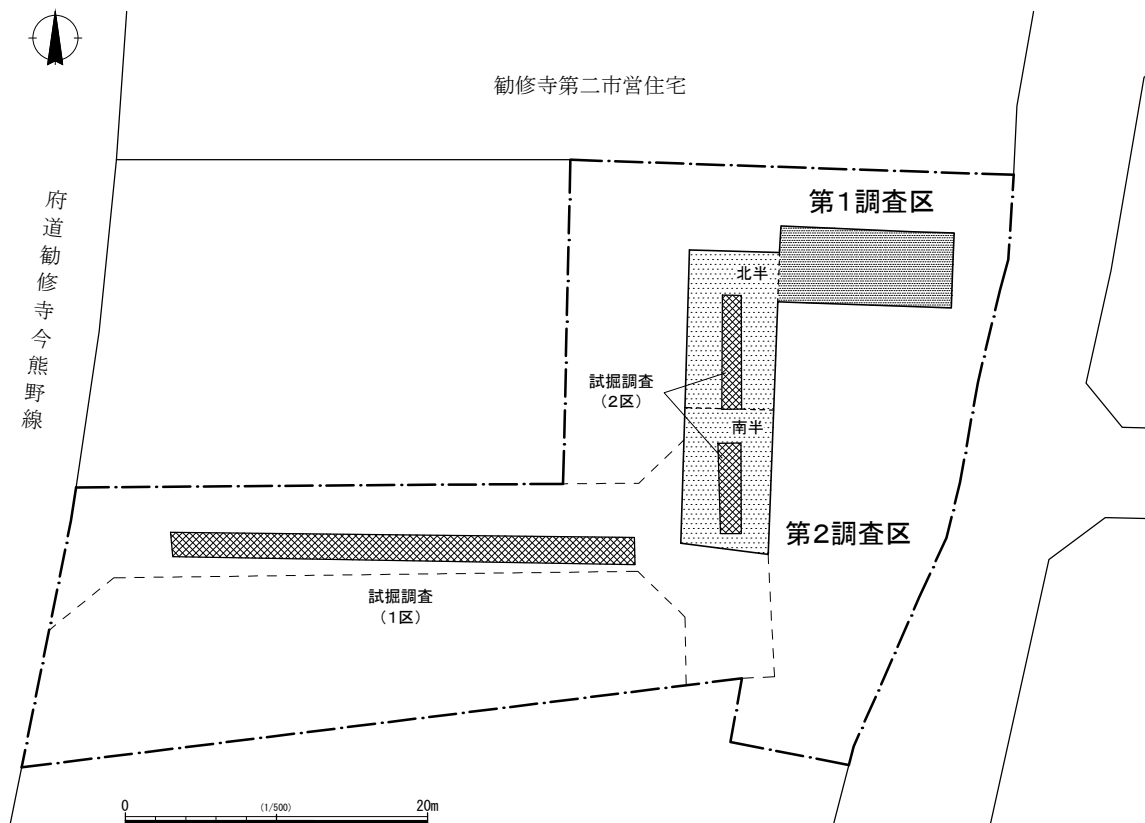
図版 1	1. 調査前風景 1 南西から	図版 9	18. 建物 3・完掘状況 北東から
	2. 調査前風景 2（河岸段丘崖）南東から		19. 第 2 調査区拡張区・調査状況 北東から
図版 2	3. 調査区全景		20. 調査区南壁・土層堆積状況 北から
	（第 1 調査区西半～第 2 調査区）北東から		21. 第 2 調査区拡張区・遺構土層堆積状況 東から
図版 3	4. 第 2 調査区南半・遺構検出状況 北西から		22. 調査区南壁・土層堆積状況 北から
	5. 第 2 調査区北半・遺構検出状況 北から	図版 10	23. 調査区西壁・南端土層堆積状況 東から
図版 4	6. 第 2 調査区全景 南東から		24. 調査区西壁、中央南半・土層堆積状況 東から
	7. 第 2 調査区全景 北から		25. 調査区西壁、中央北半・土層堆積状況 東から
図版 5	8. 建物 2・土層堆積状況 北西から		26. 調査区西壁・北端土層堆積状況 南東から
	9. 建物 2・完掘状況 西から		27. 第 2 調査区北壁・土層堆積状況 南から
図版 6	10. 第 2 調査区南半・遺構掘下げ状況 北東から		28. 第 2 調査区北壁・土層堆積状況
	11. 建物 3・土層堆積状況 北西から		（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩）南から
図版 7	12. 建物 3・土層堆積状況 北西から	図版 11	29. 第 1 調査区北壁・土層堆積状況
	13. 土坑 2・土層堆積状況 南から		（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩）南東から
	14. 建物 1・掘下げ状況 南西から		30. 第 1 調査区南壁・西半土層堆積状況
	15. 第 2 調査区南半・遺構掘下げ状況 北西から		（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩）北東から
図版 8	16. 建物 4・土層堆積状況 北東から		31. 第 2 調査区南壁・東半土層堆積状況
	17. 建物 4・掘下げ状況 北東から		（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩）北から
		図版 12	1. 弥生土器 2. 土師器・須恵器 3. 須恵器（甕）

第 1 章 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

調査地は京都市山科区柳辻番所ヶ口町 731-1,32-2、勸修寺東栗栖野町 77-5,77-6 番地に所在する。当地は西北から南東流する旧安祥寺川と東でほぼ南流する山科川の合流点の北側で両河川に挟まれて両者の合流地点北側に広がる栗栖野丘陵上に展開する中臣遺跡内に位置している。

令和元年 6 月に宅地造成の計画で京都市文化財保護課に届出が提出され、協議の結果、道路部分の発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。第 1 図に開発業者と京都市文化財保護課で協議の結果、調査対象地となった部分を図示する。京都市文化財保護課が遺構の分布状況を把握するための試掘調査を行ったところ、敷地内東西方向の道路部分においては遺構の分布が希薄であったため、調査対象は図示した部分のみとなり、対象面積は約 175㎡となった。



第 1 図 調査地位置図

2. 発掘調査の経過

調査区は宅地造成に伴う道路予定地内に設定した南北5 m×東西約11.5 mの第1調査区と、南北約20 m×東西6 mの第2調査区の調査区を設定した。残土置き場は、対象地西側への導線の関係上、第1調査区より重機掘削を開始した。ところが、2 m掘り下げを実施した段階でも、遺構面は確認できず、山科川に落ち込む河岸段丘の状況を想定し、約2.5 m掘り下げを行った段階で、氾濫原と思われる砂礫層を確認した。また、用意した掘削用重機の活動限界を超えたことから、この面で重機掘削を終了し、人力での遺構検出に努めた。西側に向け遺構検出を進めたところ、第1調査区西端に近いところで砂礫層の立ち上がりが確認できた。慎重に立ち上がりの検出を進めた結果、褐色土層を確認したので、全体的に同層上面まで重機を入れて掘削を行い、その後、人力で遺構検出を行ったところ、調査地内にて明確に遺構が確認された。

なお、第2調査区の南端は進入路確保のため、安全上当初の調査対象から外した。対象外とした部分は調査完了後、拡張区として、埋め戻し時に調査を行った。

3. 調査日誌抄



写真1 調査地前景（段丘崖か） 南東から

7月29日

敷地内整備し、調査範囲割り付けを実施。

基準点水準点移動。

7月30日

重機掘削を第1調査区から実施する。



写真2 機械掘削 北東から

7月31日

調査区壁面整形、遺構検出河岸段丘崖面の検出と考えられる落込みを確認、可能な限り低位段丘面の確認を行うが、掘削可能な深度の限界に近いことから落ち込み肩部の検出に努め、そこから第2調査区の重機掘削に切り替えていく。

8月2日

【京都市検査立会い】



写真3 第1調査区段丘崖 上段下段 南東から

8月5日

第1調査区壁面整形、壁面断面図、調査区平面図作成、第2調査区遺構検出継続

【京都市検査立会い】

8月6日

第2調査区遺構検出継続

8月8日

第2調査区遺構検出状況写真撮影

8月9日

地元市民より、河岸段丘の検出状況について取材を受ける。

【京都市検査立会い】

8月13日

検出遺構の掘り下げと不明瞭箇所の再検討。
一部台風対策。

8月14日

台風対策。

8月19日

建物遺構の埋土掘り下げ。

8月24日

建物遺構の再検討、掘り下げ、平面図、遺構断面図作成。

8月26日

建物遺構と切り合い遺構の掘り下げ、全景写真の撮影準備、清掃開始。

8月27日

建物遺構掘り下げ、全景写真撮影準備、全景写真撮影、雨天のため3方向より35mmカメラのみで撮影。



写真4 調査区全景 南東から



写真5 第2調査区遺構検出状況 西から



写真6 建物3検出状況 西から

8月28日

雨天のため調査中止。

8月29日

建物1から3掘り下げ完了写真撮影、第2調査区壁面断面写真撮影。

遺構平面図作成。



写真7 建物3掘り下げ状況 西から

8月30日

雨天のため調査中止。

8月31日

近隣向け現地説明会実施（参加者27名）。

下層確認トレンチ掘り下げ、一部遺構掘り下げ実施。



写真8 近隣向け現地説明会風景 南西から

9月2日

埋め戻し開始。第2調査区南端安全上調査を中止していた部分を拡張する。遺構検出後、遺構掘り下げ、写真撮影、実測図作成。

9月4日

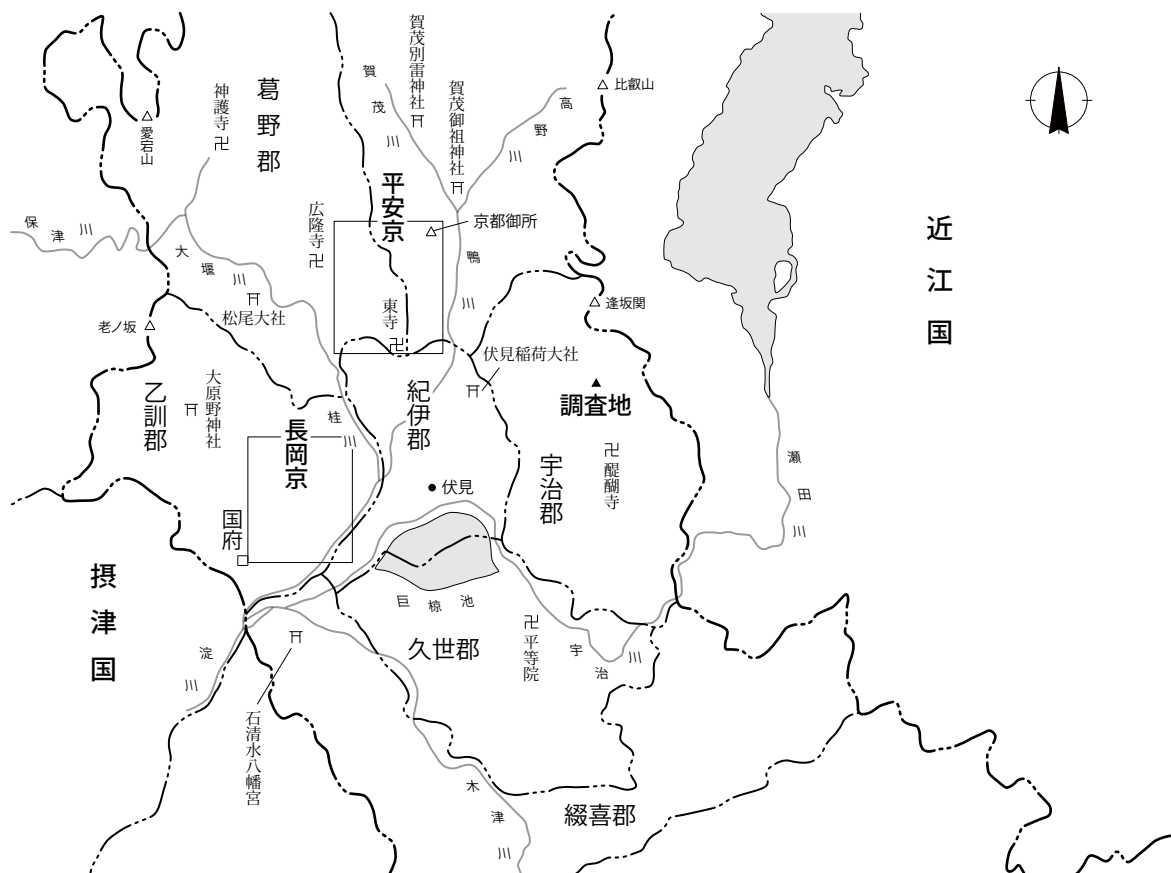
埋め戻し完了。機材引き上げ完了。

第2章 位置と環境

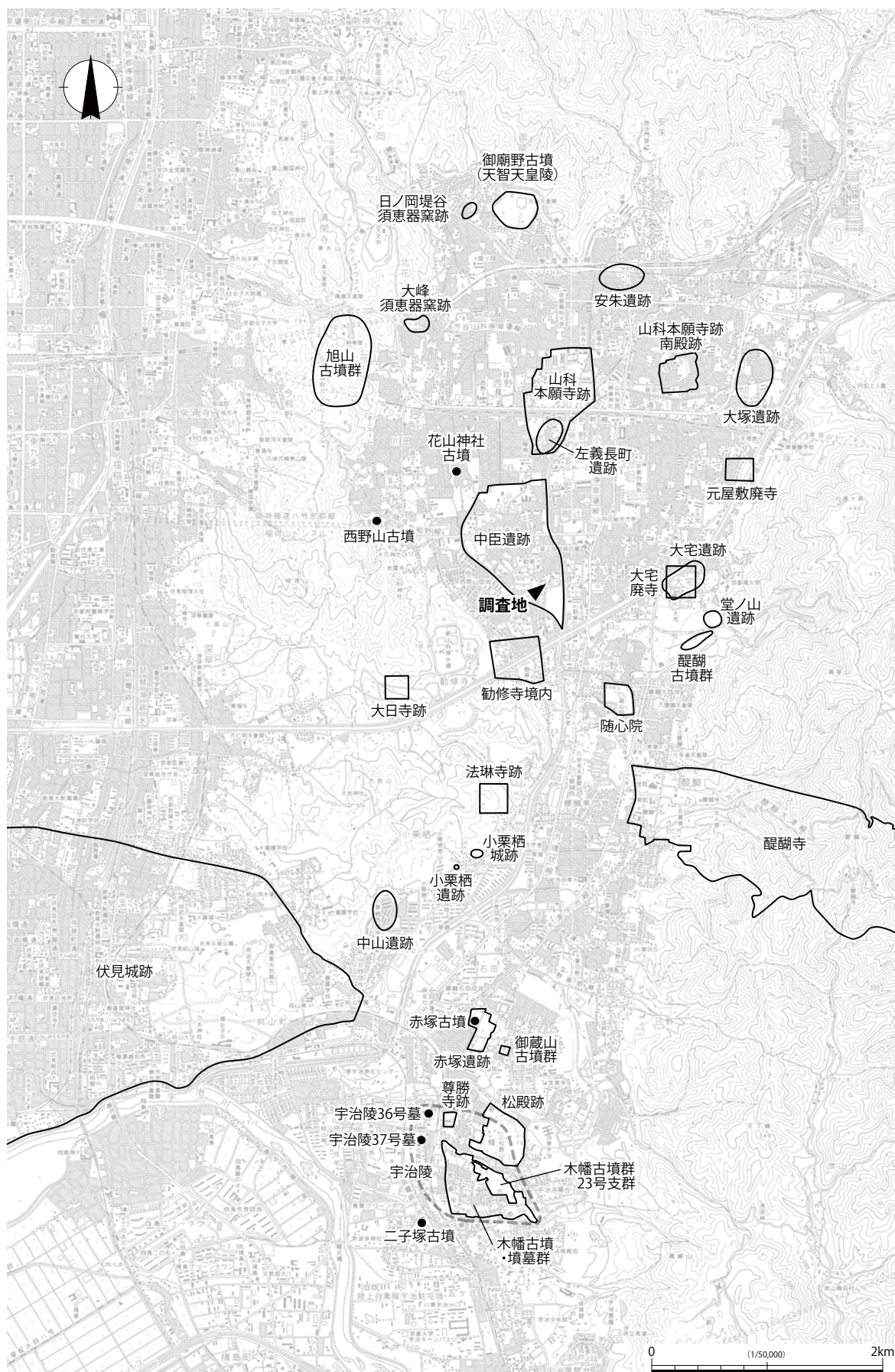
1. 地理と歴史的環境

中臣遺跡の歴史的環境を理解する上で、古代において宇治郡域内の遺跡であるという視点から宇治郡がおかれている山城と近江の国境、ひいては山城と近江の全体のなかでの宇治郡及び中臣遺跡の歴史的な位置付けを考える。

古代山城（山背）における宇治郡は、現在の行政区分でいう京都市山科区北半から同伏見区東端部、及び宇治川河口からほぼ宇治川ラインの宇治市北東半部を一つにまとめた郡域を有していた。古代においては山科の小盆地全域から、巨椋池の北東までとなる。山科盆地と宇治川河口以北の巨椋池東北沿岸部を一つの郡域として括ったのか、興味ある古代の行政単位ではある。古代日本の律令国家の国郡レベルの行政単位の設定にあたっては、地理的単位に対する配慮はもちろんあるようだが、古墳時代以来の地域勢力分断あるいは分割的にする目的の線引き、逆に地域勢力の版図を一括容認する方向での線引きがあるように見られる。小さい単位だが宇治郡の例は後者であったと見てよいと考える。理由は古代から中世の遺跡、墳墓群展開や藤原系氏族の屋敷、別荘、寺院などの郡域内への広がりの方に見出せる。



第2図 山城国宇治郡と関連主要遺跡平面概念図



第3図 山科区・伏見区東端部・宇治市関連主要遺跡略位置図

中臣氏との直接的関連を、根拠をもって理解を示せる遺跡はないが、山科盆地の中央西半に中臣町という地名が残る地区を中心として名称の付された、かなり広大な中臣遺跡が設定されている。中臣遺跡は弥生時代以前の遺跡も大きく重なるが、6世紀後半～8あるいは9世紀とされている古墳時代後期後半～古代の中臣十三塚古墳と集落遺跡の既調査成果が、遺跡の盛期をよく示している。中臣遺跡はこの時代の遺跡だけにおいても、山科盆地最大の集落である。さらに時期を同じくする古墳群は、遺跡の北東の東山山地の山科側斜面頂部近くで30基以上の古墳からなる旭山古墳群、またほぼ同時期の20数基からなる古墳群が遺跡西方の高塚山山麓で醍醐古墳群として調査されている。古墳時代最末期（飛鳥時代後半）頃7世紀後葉には、天智（天皇）陵古墳が、盆地北辺部の御陵御廟野町の地に造営されている。天智天皇は、山科盆地から谷筋でつながる現在の滋賀県大津市の北半部の琵琶湖西岸の地に大津宮を営んでおり、そこで671年に没している。天智陵古墳の西側隣地の日ノ岡は、中臣（藤原）鎌足の邸宅の推定地の一つである。鎌足の邸宅また初期の墓（大阪三島地域へ移す前の墓）に関しては、中臣遺跡及びその南側近くの勧修寺付近が最も有力と考えられるが、京都の考古学者の今後の課題である。さらに宇治郡の南部、巨椋池の山科川河口以南、宇治川河口以北の巨椋池北東辺の岸部地帯から山裾の地域を見ると、現在の宇治市北東部地区には木幡の宇治陵群を中心にした古墳時代後期から古代にかけて、連綿と形成の続いた一大古墳群及び古墓群が形成されている。墳墓の総数は320基以上との説もあり、墓域も御蔵山西南麓で9万㎡とみられる非常に大規模な遺跡である。平安時代に入り、円墳も含む古墓は皇后となっていた女性の墓と藤原房前以来の藤原氏北家の氏長者の墓が中心であり、現在は御陵として宮内庁の管理墓である宇治陵とされているものが数十基に及んでいる。この木幡を中心とする古墓群は、藤原氏の一大墓所であることは多言を要しないが、中臣氏との関連については文献的にも考古学的にも調査が少なく言及は難しい。しかし、宇治郡内の中臣遺跡を中心とする集落址の成立と展開とは、木幡の古墳群の成立と古墓群への連続性は時代的にほぼ重なっており、中臣の地名が中臣氏の歴史的存在を示しているとすれば、藤原氏の古墓群に連続する若干先行した前方後円墳を含む終末期の群集墳が、中臣氏と直接関連した墓址群と考えることは十分に可能である。また若干加えておくと、木幡の古墓群と関する藤原氏の古墓は、山科盆地の勧修寺や小野、醍醐、安祥寺でも確認されており、密度差はあるが宇治郡域全体に広がっていると見てよいだろう。しかし、考古学は物証を前提として立論すべき学問であり、結論を述べるのはここでは控えておく。可能性は低いが、調査の少しでもの進展を待ちたい。しかし、古墳以外に古墓群まで加えると、宇治郡しいては山城にとどまらずこの時代においては全国的にも屈指の大墳墓遺跡であり、現行政境を越えた研究が不可欠と考えられる。

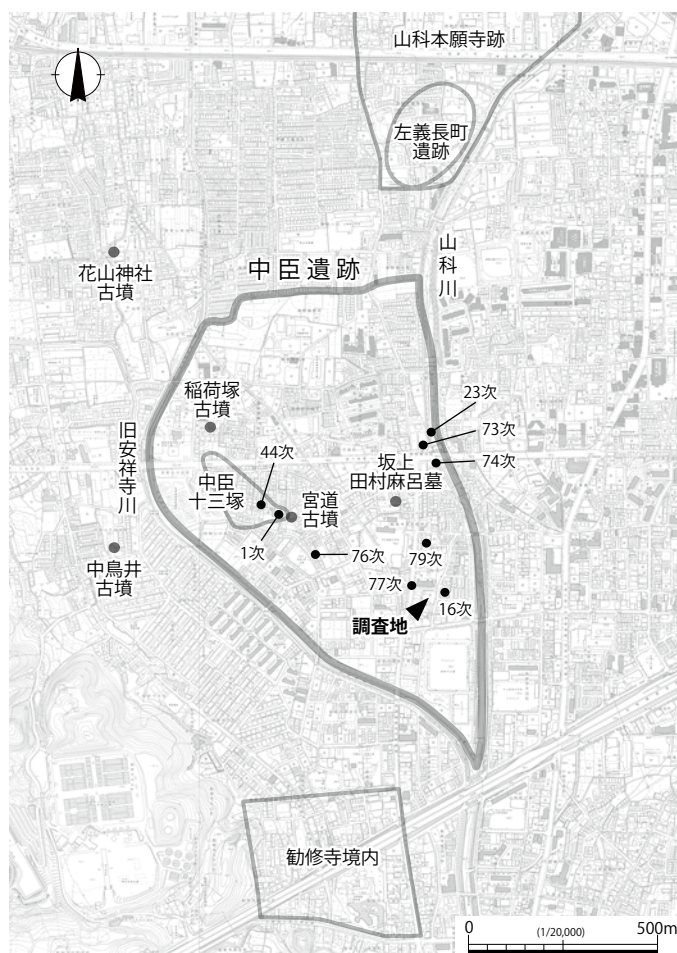
2. 既往の調査

(1) 中臣遺跡の既往調査概括

中臣遺跡は、山科盆地を南端部となる現在の宇治市市街地の北部付近までと捉えると、袋状に広がる盆地北半部の南西部付近に位置する。遺跡の敷地範囲は、西側を旧安祥寺川、東側を山科川に挟まれて、両河川が合流する地点を南端とした南北約 1.3km、東西約 0.8km に及ぶ、北辺が広がる三角形を呈する。全体では、約 50 万 m² 以上の広大な平面規模を有した大遺跡である。遺跡は地形的には盆地低地部に立地しているが、東西は両河川に開析された小谷地形である。遺跡内は北部中央付近が高く、東西に緩く傾斜し、南へも下がる、谷地形に挟まれた小丘陵的地形を呈している。各時代の遺跡は、この低い小丘陵地形上に展開している。

遺跡内の土地利用の歴史は、2 万 5 千年程前と推定されている旧石器時代に既に始まっている。この旧石器時代以降の縄文時代晩期から弥生時代前期・中期の、盆地全体の中でも古く位置付けられる遺構・遺物が、遺跡の北東部の山科川両岸地域における、中臣遺跡 23 次・73 次・74 次調査によって確認されている。続く弥生時代中期の遺跡は、先の 23 次調査地において方形周溝墓群の一端が確認されているが、同中期から後期にまで幅を見ておく必要がある方形周溝墓群は、今回の調査地の近接地域となる遺跡の西辺中央あたりでも確認されるようになる。このように墓地群は発見されているが、住居址的遺構がほとんど発見されていない点は注意を要する。墓地群の近接地に住居址を中心とする集落が並存している例は、全国的には少なくない。今後検討が必要な課題である。

弥生時代後期から古墳時代初め頃の竪穴住居址（群）は、遺跡内のほぼ全域の調査地で確認出来る。局所的には空閑地も多く存在しているであろうが、全域が一大集落遺跡を呈するのか、十分な検討が必要な程の盛況を呈するようである。しかし、古墳時代中期頃には、集落址は急速に縮小するようである。同中期後半頃には集落地に代わり、遺跡南東部の 79 次調査地では小型の方墳群が



第 4 図 中臣遺跡概要図

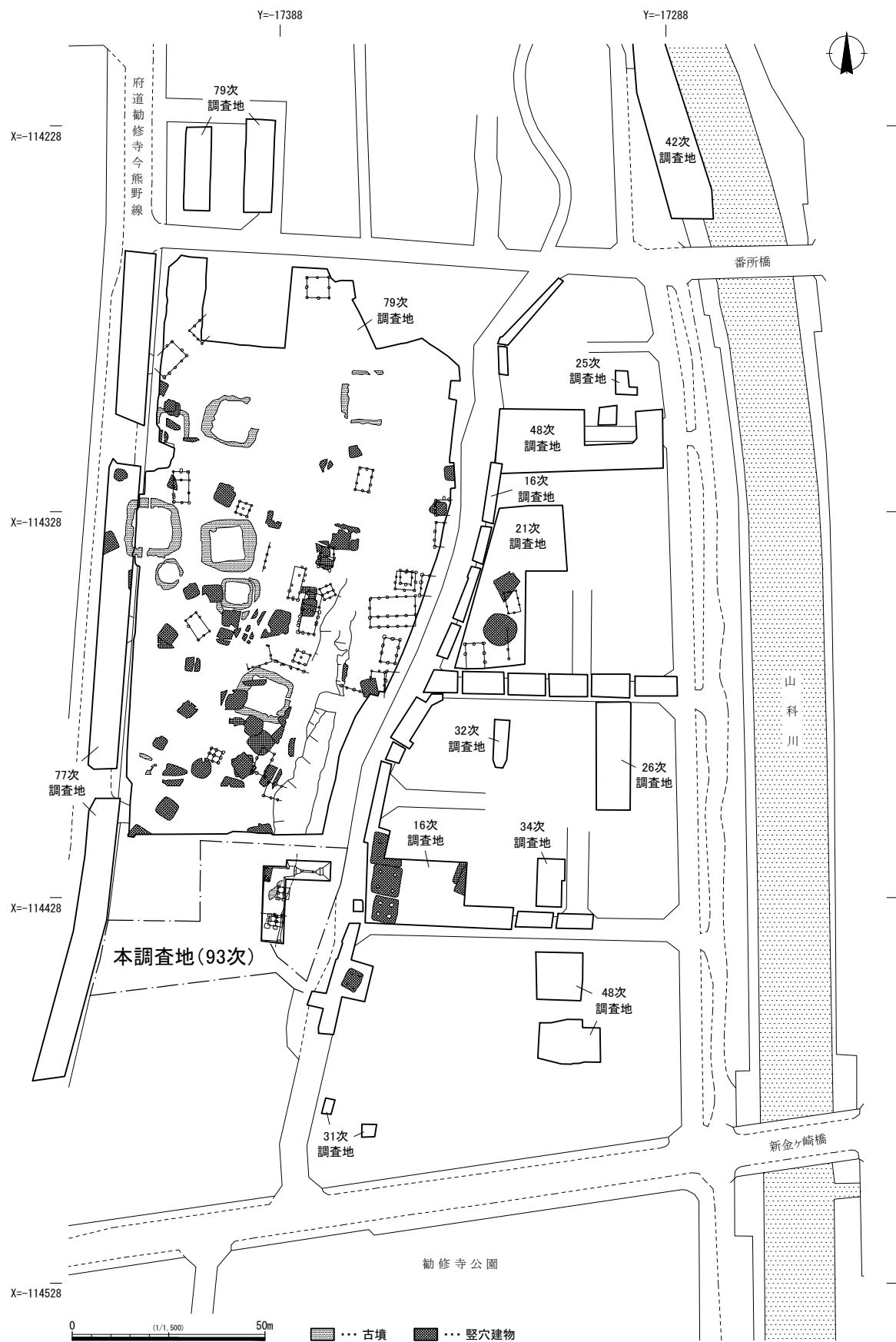
確認されるだけとなる。

古墳時代も後期から末期（飛鳥時代）、さらに続く古代初め頃にかけては、遺跡全域が再び大きな盛期を迎えたと言える。遺跡中央部付近には、中臣十三塚とされた古墳群が形成され、遺跡の全域で隅丸方形の竪穴住居址が展開していたと見られる程に、各調査で住居址が確認されるようになっていく。既存の土器の年代観では、古墳時代後期（6世紀）～古墳時代末期の7世紀それも前半頃までに、盛期の比重がおかれているような理解が示されているが、土器編年観を妥当に修正してみると、6世紀末以降、古墳時代末期（古代初め頃）となる7世紀～8世紀初頭頃に、集落遺跡の大きな盛期があったと理解される。古墳時代最末期（7世紀後半・飛鳥時代後半）から古代初め頃（7世紀末～8世紀前半）には竪穴住居址に加えて、遺跡南部の16次やその北西方向の44次の調査地などから、宮殿クラスを含む掘立柱建物址が確認されるようになる。古墳時代最末期頃（7世紀後半）には、土地利用の質的变化も加わるようである。しかし、奈良時代以降には、遺跡は急速に衰退するようにも見えるが、盆地全域に拡散すると見るのが妥当だろう。古代律令国家の成立により、国家耕作地の条里的整備、集落の移動など、国家主導の地域社会の再編が進む結果と考えられる。しかし、古墳時代後半から古代、さらに中世への遺跡の変化（歴史）に関しては、本質的にはそれ以前も同様であるが、89次までの調査成果の総合的整理・研究を加えた上で、理解を深める必要がある将来に積み残された大きな課題であると考えている。

（2）調査地付近の調査事例

現調査地周辺は、北側隣接地の京都市営勧修寺第2市営住宅建設に伴う調査で、79次調査が平成11年度に、西側隣接地では府道拡幅に伴う調査で、77次調査が平成10年度に、東側隣接地では区画整理事業に伴う調査で、16次調査が昭和53年度に実施されている。第5図に16次、79次調査地の遺構分布状況を掲載する。当該地は栗栖野丘陵の先端付近で、勧修小学校付近を丘陵先端部付近の最高所にして、緩やかに南東方向に傾斜している。周辺の調査では79次調査北西よりが最も高く、報告では高位段丘とされている。順に東に向かって、中位段丘、低位段丘が確認されている。確認された遺構は古墳の封土が削り取られた状況で確認されたものや、竪穴、掘立柱の建物が多数確認されている。また、低位段丘にあたる16次調査では三面に底がつく大型の掘立柱建物が確認されている。現調査地は周辺の状況より、第2調査区が中位段丘面に、第1調査区が低位段丘面にあたると思われる。

現調査地と79次調査地との遺構の類似性は古墳の周溝と考えられる溝や、北向きに主軸を持つ掘立柱建物や、同時期の竪穴建物となるが、比較すると、規模・企画性の面で79次で確認している遺構群と同一の分布範囲に収まるものという印象が強い。



第5図 調査地近辺地の既往調査地位置図 (1/1,500)

【参考文献】

- 『京都の歴史 - 1 平安の新京』 京都市編 学芸書林 1970 年
 『史料 京都の歴史 - 山科区 11』 京都市編 平凡社 1988 年
 『国史大辞典』第 14 巻他 国史大辞典編集委員会 吉川弘文館 1993 年
 『謎の古代 - 京・近江 京滋文化の源流を探る』 京都新聞社編 河出書房新社 1981 年
 「ヤマト政権と京滋の豪族」 平野邦雄・他
 『本願寺と山科二千年』 山科本願寺・寺内町研究会編 法蔵館 2003 年
 「原始 古代の山科」 丸川義広
 「平安時代の山科 - 条里と古道」 金田章裕・他
 『歴史の眠る里 わが山科』 飯田道夫 人間舎 2015 年
 『京都府遺跡地図 第 4 分冊 (第 2 版)』 京都府教育委員会 1985 年
 『京都府遺跡地図 第 4 分冊 (第 2 版)』 京都府教育委員会 1989 年
 『京都市遺跡地図台帳』 京都市埋蔵文化財調査センター編 京都市文化市民局 2003 年
 『日本の自然 地域編 5 近畿』 大場秀章・他 岩波書店 1995 年
 『発掘ものがたり宇治』 杉本宏 宇治市歴史資料館 1996 年
 『おぐら池 - 入江、大池、巨椋池 - 』 宇治市歴史資料館 2003 年
 『宇治橋 その歴史と美と』 宇治市歴史資料館 1995 年
 『宇治の歴史と文化』 宇治市教育委員会 1988 年
 『宇治市史 1 ～ 6』 林屋辰三郎・藤岡謙二郎編 宇治市 1973 ～ 1981 年

報告書

- | | | |
|--|-------------------------------|--------|
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 51 年度』
「中臣遺跡 7 次調査」 1977 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
伊藤 潔 | 2008 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 52 年度』
「中臣遺跡 8 次調査」 1978 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
上村和直 | 2011 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 53 年度』
「中臣遺跡 16 次調査」 1979 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
網 伸也 | 2012 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 54 年度』
「中臣遺跡 23 次・33 次調査」 1980 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
上村和直 | 2012 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 55 年度』
「中臣遺跡 35・44 次調査」 1981 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
伊藤 潔・網 伸也 | 2011 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 57 年度』
「中臣遺跡 52 次調査」 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
平方幸雄・辻 裕司 | 1982 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 60 年度』
「中臣遺跡 63 次調査」 1986 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
丸川義広・木下保明 | 1988 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 62 年度』
「中臣遺跡 68 次調査」 1988 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
平方幸雄 | 1991 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 6 年度』
「中臣遺跡 73 次調査」 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
内田好昭・高橋 潔・他 | 1996 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 7 年度』
「中臣遺跡 76 次調査」 1998 年報告 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
平方幸雄・高 正龍 | 1999 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 11 年度』
「中臣遺跡 79 次調査」 | （財）京都市埋蔵文化財研究所
内田好昭・高 正龍・他 | 2002 年 |
| 『中臣遺跡』 菅田 薫
※ 1 次～ 6 次調査までについての記載を参考にした | （財）京都市埋蔵文化財研究所 | 2006 年 |
| 『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 26 年度』 | 京都市文化市民局 | 2015 年 |

第3章 調査成果

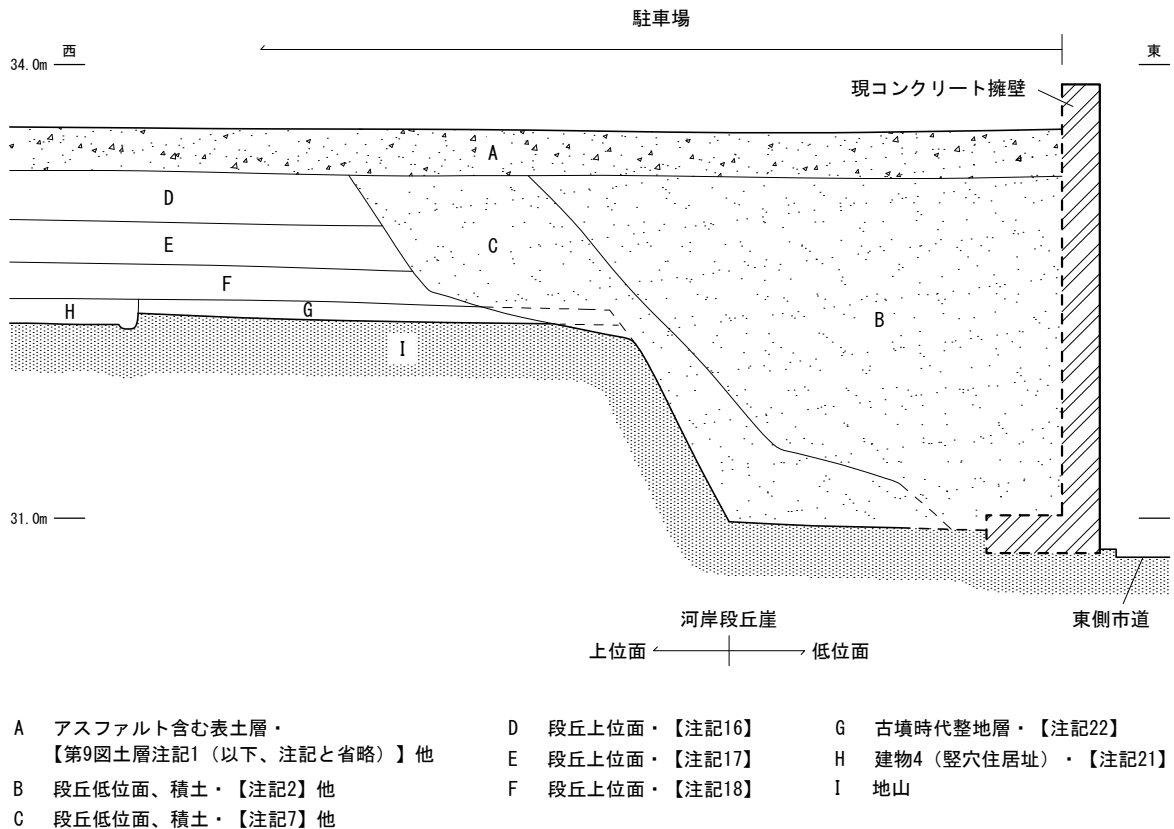
1. 基本層序

(1) 遺構面概要

今回の調査は東西方向の調査区を1区とし、その西端から90度に折れて南に延びる2区とした南北トレンチ調査区からなる。第1調査区西辺部では東面する段丘崖を検出している。この段丘崖より東側は比高差1.5m程にもなる低位面も確認しているが、検出面が狭小なため、遺構は検出できなかった。西側の南北トレンチの2区ではほぼ全体に段丘崖より上の上位面が検出される。段丘崖は自然堆積土層（いわゆる地山であるI層）で形成されている。I層上面には地山の塊が混じる整地層と見ているG層が平坦に堆積しており、上面では古墳時代後期から古代初頃の遺構群を検出している。なお、第2調査区の南東部では南西から東北へ延びる東面する河岸段丘崖面の西肩の一部を検出している。北北東へ延びて第1調査区西辺部の段丘崖へ続き、さらに北へ延びるものと見てよいだろう。

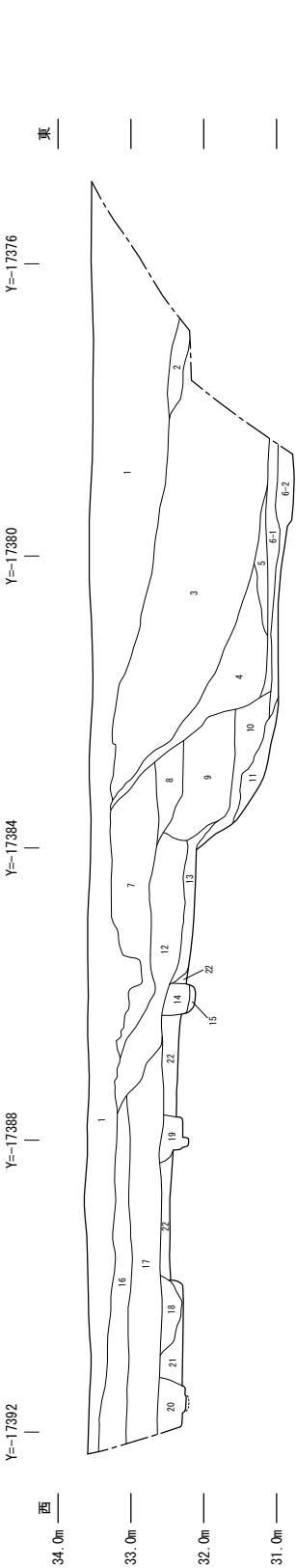
(2) 基本層序

下の概念図上ではA層～I層と表示している堆積土層は大きくは、2群に分けてまとめられる。

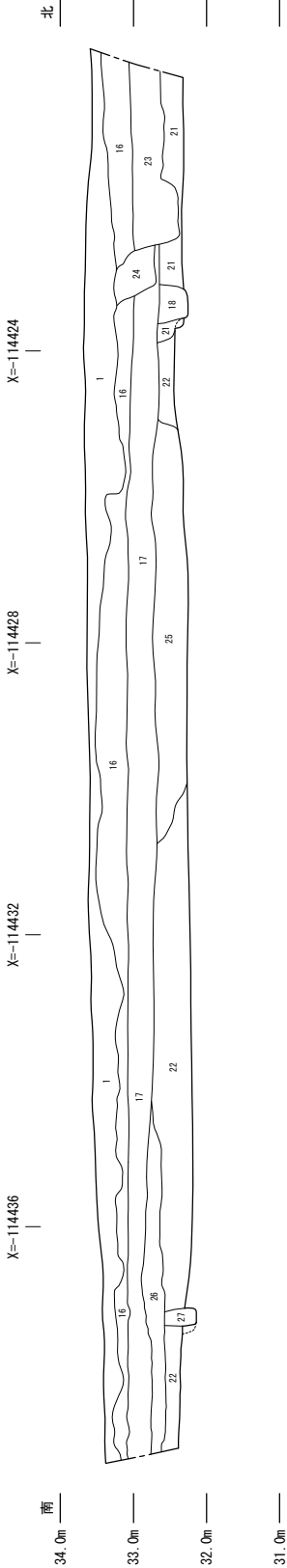


第6図 基本層序概念図

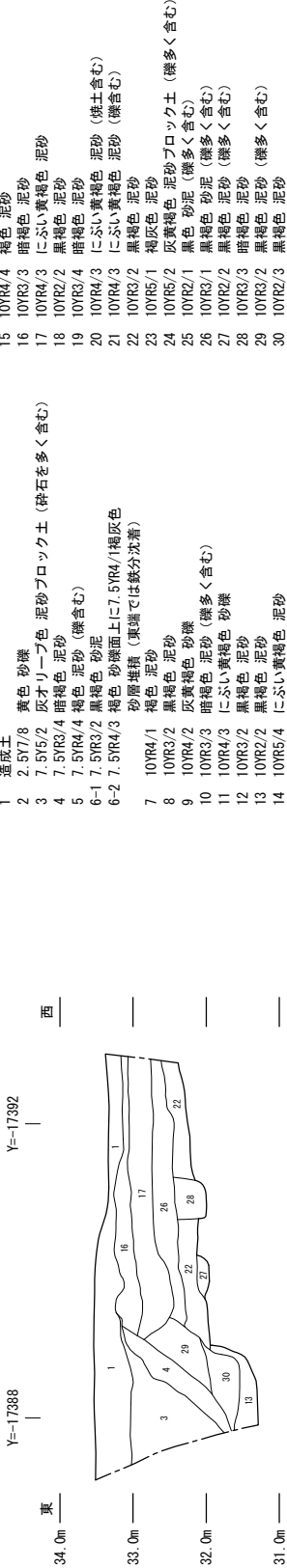
第1・2調査区・北壁



第2調査区・西壁



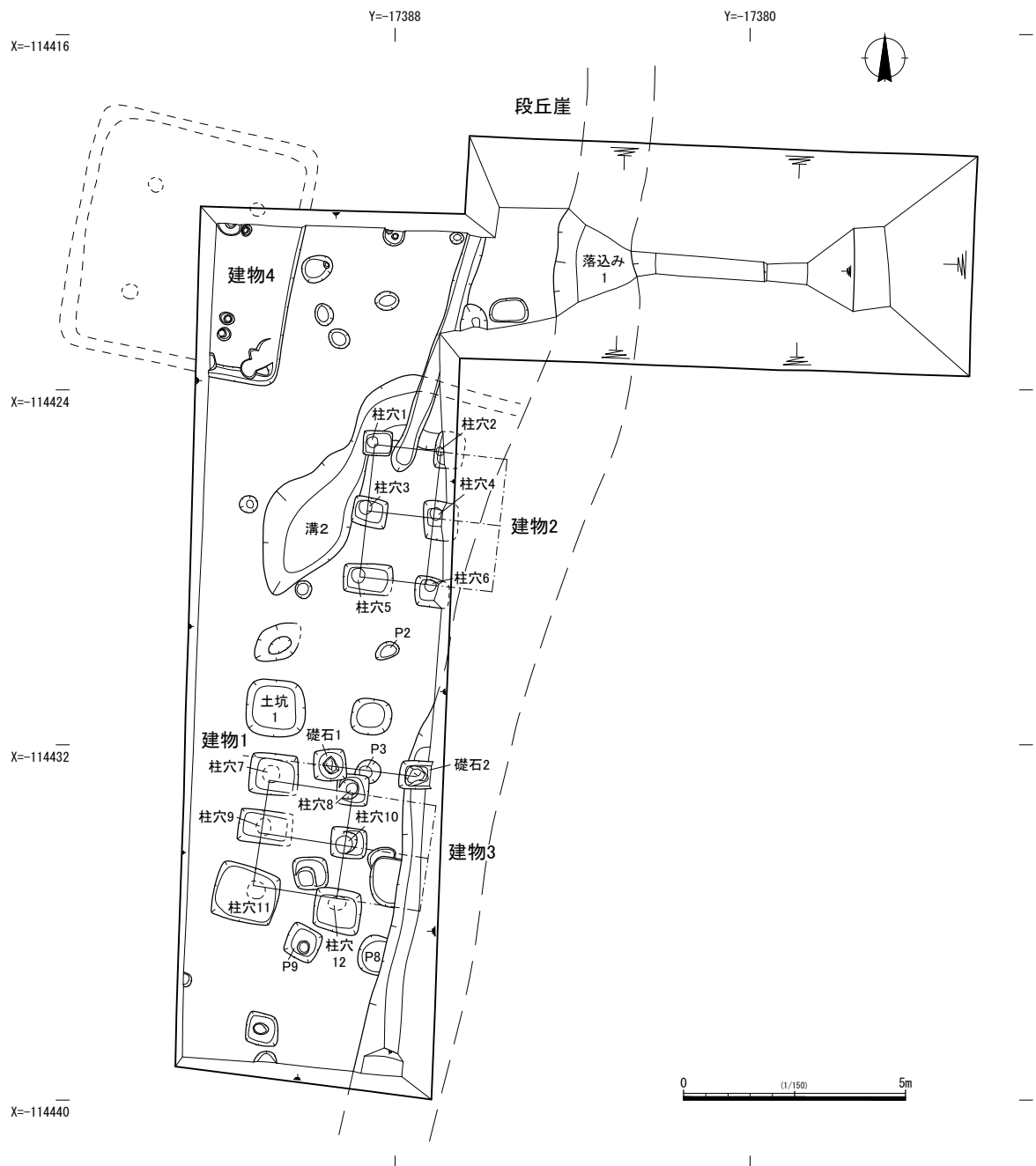
第2調査区・南壁



第 7 図 調査区土層断面図

1 群は第 1 調査区中心に認められる段丘崖から低位面を埋める東側へ下る B・C 層とした。埋土土層群である。この調査地における段丘の段差補正は、近代以降に行われ、現状に近い状態になったのは現代に近い時期と思われる。これらの土層にかぶる A 層とした表土層群はアスファルト片や採石を含む現代の整地土層群である。

第 2 群は主に第 2 調査区の段丘上位面に形成された整地土層や耕作土層である。D 層は近代、E 層は近世後期～近代の宅地関連の整地土層と見ている。F 層は古代から近世前半の頃の幅を持った耕作土層と見ている。I 層は自然堆積の無遺物層と見ている。いわゆる地山である。I 層下部では礫砂の混じる率が高くなる、山科川河岸段丘堆積土と見られる。



第 8 図 遺構平面図

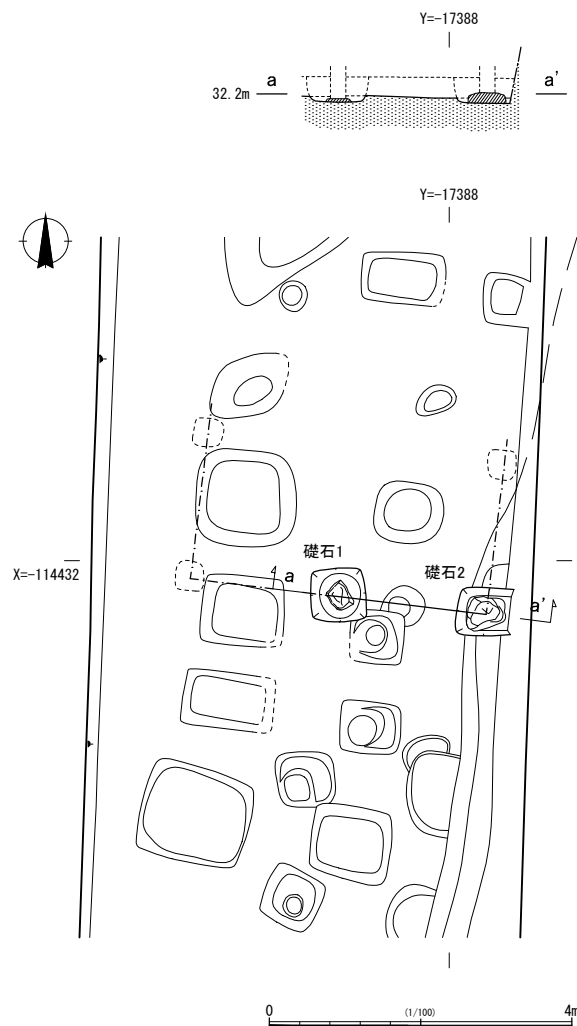
2. 遺構

遺構は南北トレンチの第2調査区で検出し、検出面は北端が最も高く、南側に向けて緩やかに下る。また、河岸段丘低位面へ落ち込む第1調査区に向けても傾斜する。第7図の調査区土層断面注記25層は建物4の南側、座標X = -114424 ライン付近より緩やかに下っており、この地形の変化を解消するための整地土層と考えるのが妥当だと見ている。これらの整地を行ったあと、建物2・3が掘り込まれるものとする。建物2・3が廃絶したのち建物1が建てられるまでは耕作化した土地利用になるものとしている。

遺構は中臣遺跡最盛期である古墳時代後期～8世紀の建物2・3・4以外には江戸期と見られる建物1溝1、を確認している。また、先述のように段丘崖の段差解消のための埋め立ても江戸期に始まっている。概観的にみると、上記のような遺構が確認されているが、以下に主要な遺構について詳述したい。

建物1 第2調査区南半で確認した礎石立の建物である。調査区内で礎石を確認したのは2カ所だけで、建物としての全体像がつかみにくい。柱穴の底部に礎石を据えるタイプである。確認した2カ所の柱間は礎石芯々間で1.97m程を測り、京間とみてよいだろう。このことから第8図に京間で南北方向の母屋を復元した。想定した位置にはそれぞれ、ごく浅い落ち込みがみとめられるが、重機掘削時や遺構面清掃時に礎石の検出は認められなかったことから、調査当初南側に展開するものと考えたが、柱間があわないことから、北側へ展開していたであろう礎石はすでに削徐されてしまったものと考え、図のような展開で広がる河岸段丘崖段差補正埋土上面にのる、江戸時代後期以降の建物とみておきたい。

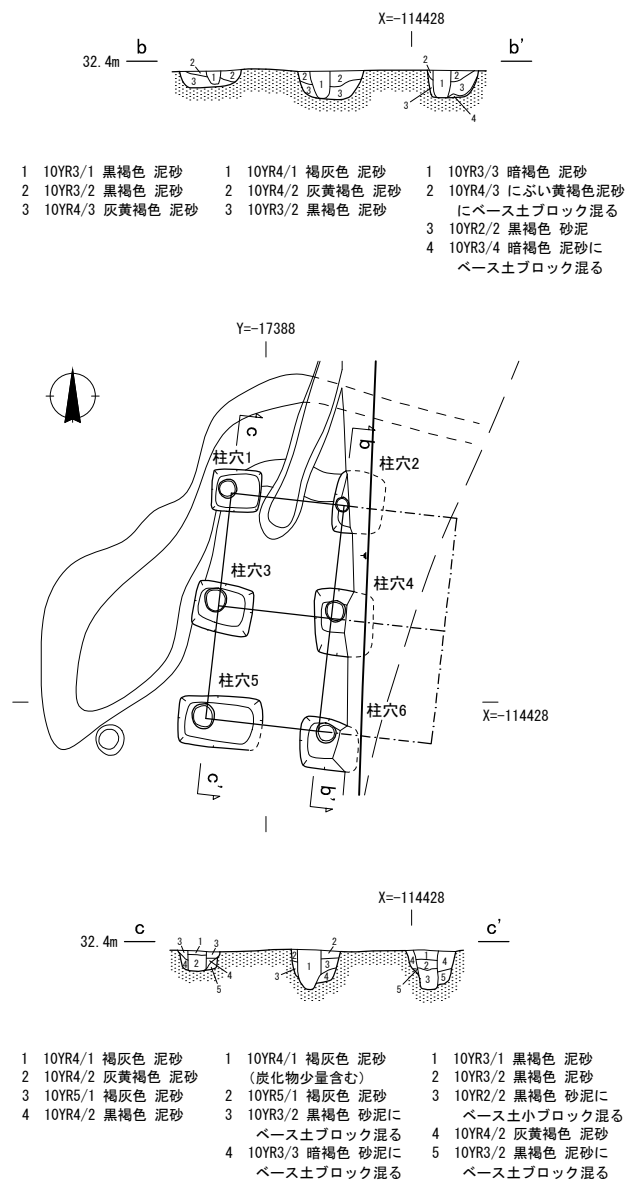
建物2 第2調査区北半で確認した建物は2間×2間の掘立柱建物とみている。調査区内での検出は南北2間、東西1間であったが、周囲に同等の掘方を有する柱穴が存在しないので東方以外への展開を想定することは困難であるが、東方の調査区外への展開は周辺の調査状況に見建物跡の状況から見て2間×2間で考えるのが最も妥当ではないかと考えており、中心にも柱あたりを持つ最小の総柱建



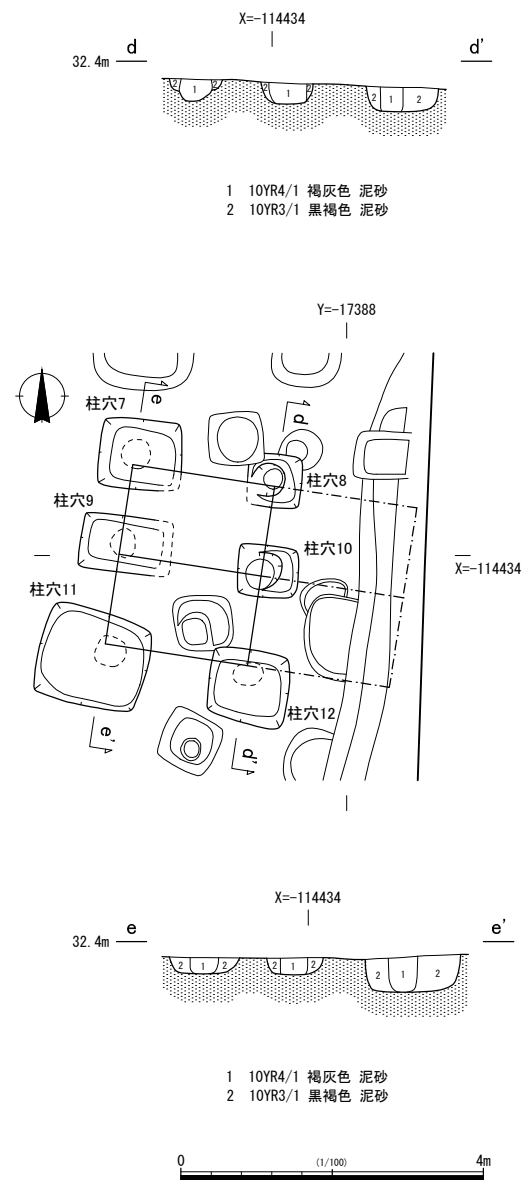
第9図 建物1 平・断面図

物とみている。柱間は1.5mを測り、柱あたりの直径は20～25cmを測る。1カ所東西方向での半裁も実施したが、端の斜め方向の落とし込みは確認できなかった。柱の底は砂礫層にまで及んでいる。検出した深さで50cmとそれほど深くないが、中臣遺跡には比較的類例の多い小さな高床の倉庫であろうと見ている。

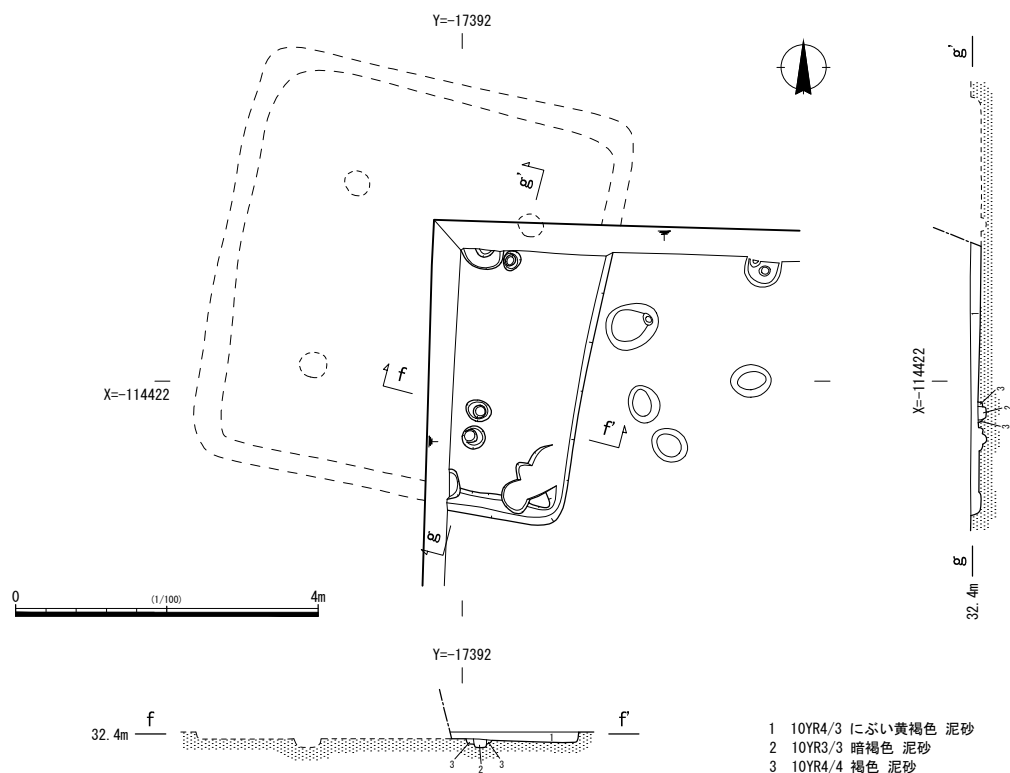
建物3 第2調査区南半で西側の半分強を検出したと見ている掘立柱建物である。調査区内では2間、東西1間分しか確認できていないが、残存する段丘崖肩等との関係から建物2と同じように東方へ大きく展開する事は考え難く、建物2と同様に2間×2間の総柱建物と考えるのが妥当と思われる。この建物の柱間は東西方向が約1.9m、南北方向が1.4m程をを測り、不規則だが、小規模な建物であり、構造上大きな問題はないだろう。建物2と同様小型の高床の倉庫とみておく。なお、この建物の北側に柱穴に似た土抗状の遺構が存在するが、断面観察の結果、柱穴とは認められなかった。



第10図 建物2 平・断面図



第11図 建物3 平・断面図

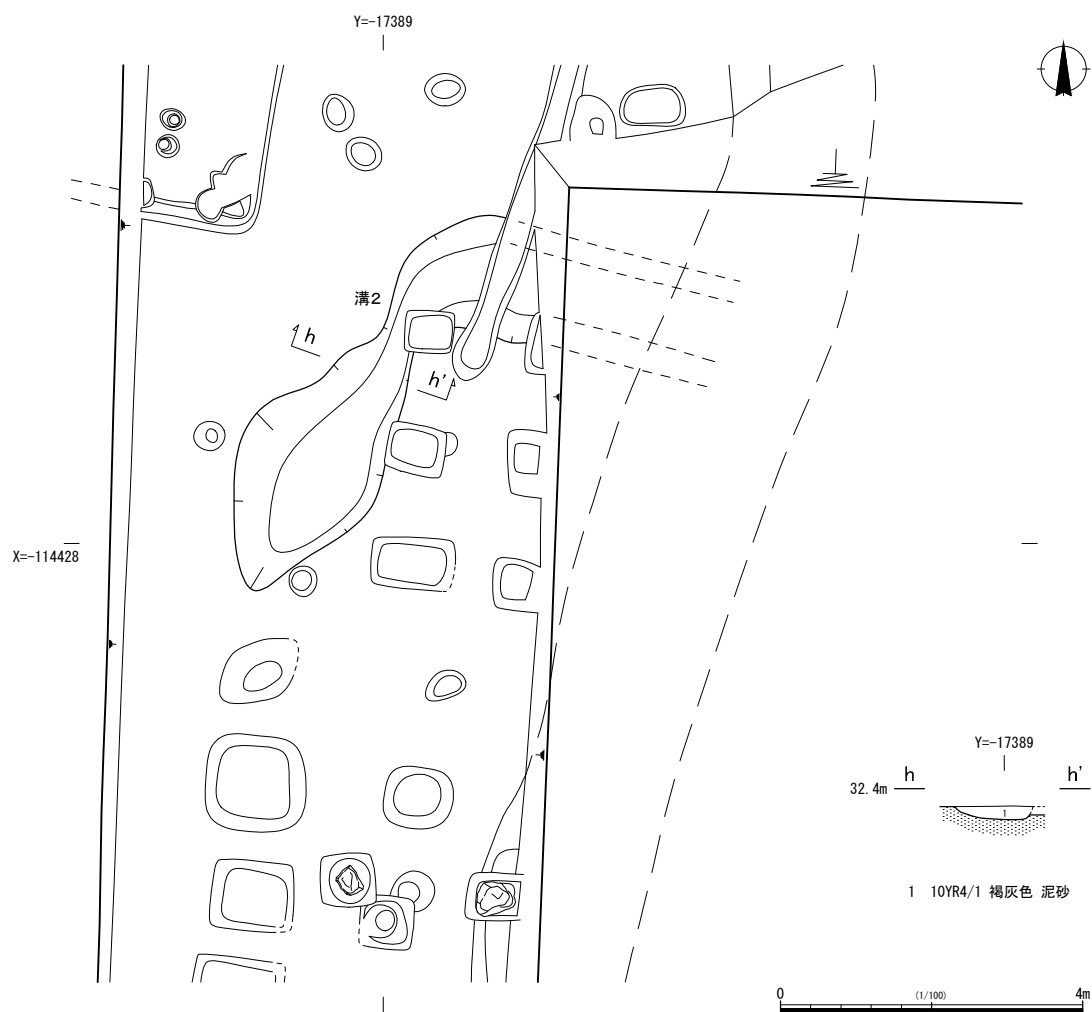


第 12 図 建物 4 平・断面図

建物 4 第 2 調査区北端で確認した隅丸方形の竪穴建物址で、上部はかなり後世の削平を受けているようであり、床面近くあるいは達している攪乱的掘り込みもあり、遺存状態は良好とは言えない状態ではあったが、建物の東壁、南壁の一部及び残存していた壁溝は一部確認している。結果的に南東角近くに位置する柱穴を検出することが出来た。検出した状況からは、隅丸方形の竪穴住居の東と南の 2 辺の側壁の一部と南東の隅を検出したものと理解される。東壁と南東の柱穴の位置関係等からは 5 m を超える側壁規模を有する竪穴住居址と推定する。これは中臣遺跡において最も普遍的にみられる規模と形状であり、北側の 79 次の既大規模調査地でもよく似た規模の隅丸方形の竪穴住居址が多数調査されている。竪穴住居址が構成する大規模集落は丘陵南辺部へも確実に広がっていたようである。

建物 2・3・4 の関係 北側の 79 次の既調査地の成果も踏まえると小型の総柱建物は、ほぼ同時期（古墳時代末期・飛鳥時代）に竪穴住居址と併存していたものと考えられる。この時代性と位置関係からは建物 2 は建物 4 に伴う小型の高床倉庫と見ることも可能と考えられる。建物 3 と関連する竪穴住居址は調査区外の西側近接地に存在している可能性が高いと考えている。

溝 2 溝 2 は第 2 調査区北半中央で、北東から南西方向に折れており、溝状を呈する。幅 1.5m 前後、深さは遺構面から 40cm 程度を測っている。今回の調査地北側の 79 次調査地では、高位段丘、中位段丘面に主に方形の溝を巡らす、小規模な古墳周溝が確認されている。第 13 図には 1 辺 10m ほどの古墳周溝とした場合の復元状況を示したが、ここでは 79 次調査でみられた周溝内の一括土器埋納や主体部痕跡などは見られなかった。しかし段丘上位面に形成された小方形古墳の周溝残欠との見方を持って周辺調査の進展を待って検討していきたい。



第 13 图 沟 2 平·断面图

第4章 遺物

今回の調査においては、少量の縄文土器片、古墳時代初頭頃までの時間軸を持って見るべき弥生時代後期を主体とした一定量の弥生土器片、7世紀～8世紀前半頃の古墳時代末期（飛鳥時代）から古代前期の奈良時代初め頃の時間軸には収まる土器群が出土している。他に近世後期から近現代の遺物も出土しているが、機械掘削中の出土が中心であり、量も少なく文章で触れるにとどめる。縄文土器はほぼ同一地点からではあるが、新しい時期の古代の包含層への混入遺物としている。1点は小片ながら外面に押形文が確認でき、早期の尖り底の深鉢と考えられる。他の1点は文様を持った部分ではないが、胎土色調等の共通性からもう1点と同時期の深鉢の体部下部の個体と判断しうる。

弥生土器と報告している土器片及び共伴的出土状況を呈する甕や壺体部片等は遺構面直上及びそれより上層の包含層及び古墳時代末期以降の遺構内堆積土への混入品として出土しているものが大半を占め、同期の遺構からの出土品は見られなかった。しかし受口状口縁部は図化可能なものを確認できなかったが、山城北部から近江南部に共通するススのついたハケ目甕体底部片を中心にミニチュアまで含んでバリエーションのある壺鉢類も一定量が出土した。包含層等からの出土ではあるが、比較的残りのよいものも含まれており、遺跡エリア内からの出土品との印象が強い。なお、時代幅に関しては土器様相は山城北部から近江南部V様式に通じるものが主体である点から弥生時代後期からV様式的土器様相が強く残る古墳時代初頭頃までの幅を持っておきたい。

古墳時代末期（7世紀・飛鳥時代）頃を中心とする遺物は土師器・須恵器を中心とする。土師器は山城から近江南部で通有に出土する受け口の長胴甕と丸底の小甕片が中心である。

他に食器類は大和南部で坏Cとされているもののローカルな類品が主のようだが、胎土も異なる内面に放射・連弧あるいは斜放射の暗文のある坏・皿が含まれていた点は注目される。土師器全体としては、古墳時代末期（7世紀）から奈良時代初め頃までの時間幅に収まる。須恵器は畿内系（陶邑系）のものが中心であり、坏H蓋、身、坏G蓋、身。坏、壺、甕片等が見られる。時代幅的には古墳時代最末期の7世紀半ば頃から奈良時代初めの8世紀初頭には収まるものが主である。土師器との共伴関係に齟齬はなく、共伴出土してよいだろう。この時期の土師器と須恵器も包含層や遺構からの混入出土品が多いが、建物2又は建物3の柱穴内や竪穴住居である建物4の遺構内からも出土している。出土量的にも遺跡の盛期の一つが、7世紀後半期～8世紀初頭にあることを示す遺物であると言える。以下では、図版等掲載した遺物の個別説明を記す。

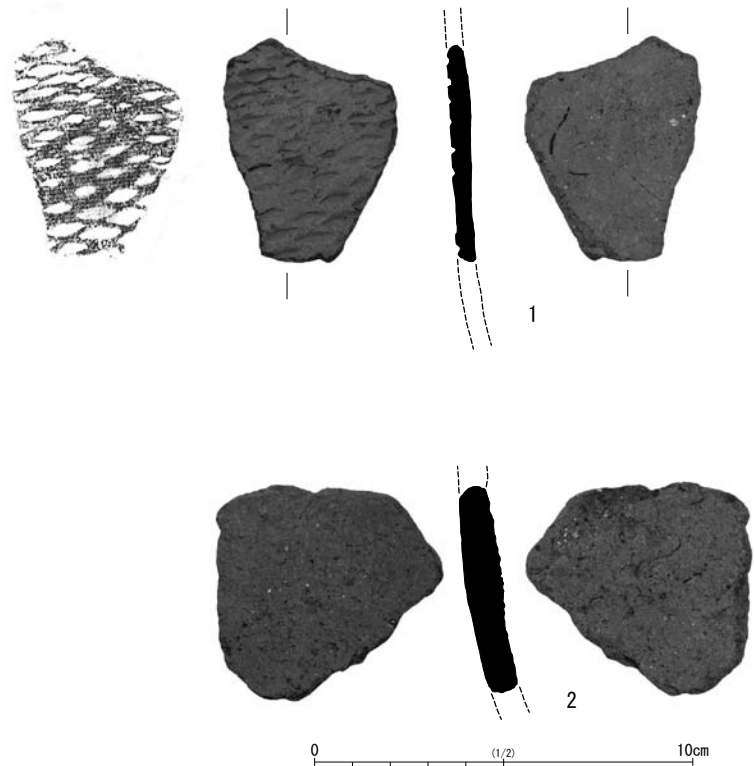
第14図は縄文土器片とした2点である。1は体部外面に密に押型系の小さな米粒状の文様を施す。深鉢の体部片である。文様を含めた類品が奈良県山辺郡山添村久川の遺跡から出土しており、押形文の一種であり縄文時代早期を代表するものとされている。この類品は口縁

部が大きくラッパ状に開き
 体部は円筒状で外面に密に
 爪形文を施す。底部はいわ
 ゆる尖り底である。今回の
 小片も同様の深鉢の体部片
 であり年代も同様ととみて
 よいだろう。2は文様は見
 られないが、褐色的色調や
 胎土等から1と同様で同時
 期の縄文土器深鉢の体部下
 部付近の破片と見ている。

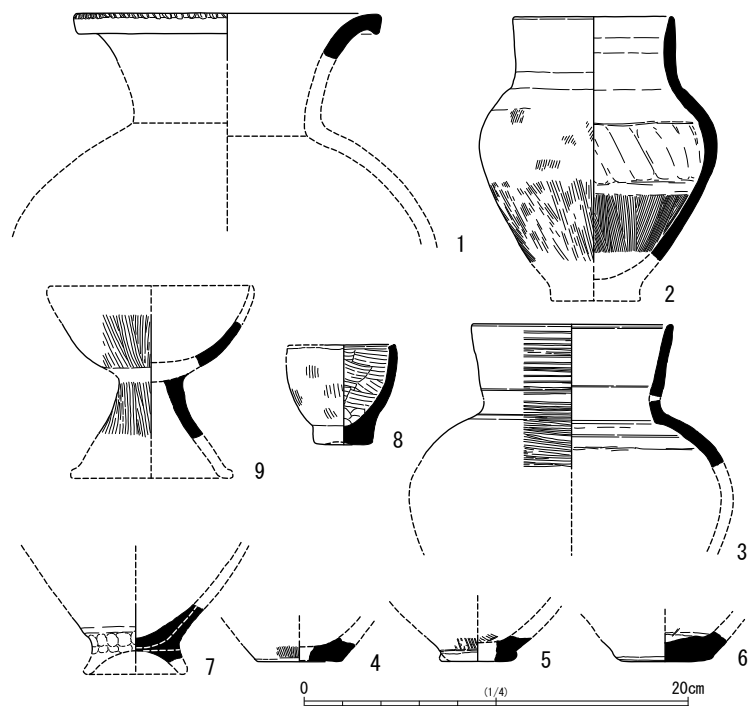
第15図は弥生土器片を
 まとめて掲載した。1・2・
 3は広口、直口の壺片であ
 り、ハケ目調整が基本であ
 り、3は外面にヘラミガキ
 が確認できる。1・2は器表
 面の残りが悪く確認できな
 かったが、両者共に本来は
 ヘラミガキを加えているも
 のと推測される。4・5・6
 は壺あるいは甕の底部の平
 底片である。7も甕の平底
 片であるが、高台状の台が
 付き、近江以東の東海の特
 徴を持っている。8はミニ
 チュアの鉢である。内外面
 共に粗いハケ目調整で仕上
 げとしている。9は小振り
 の台付鉢である。ヘラミガ
 キは見られず、ハケ目仕上

げとしている。各器形とも山城北部から近江南部の諸遺跡から出土している、畿内弥生V様式に位置づけられている土器片に類例が多く見いだせる。時代幅は弥生時代後期～古墳時代初頭と見ている。

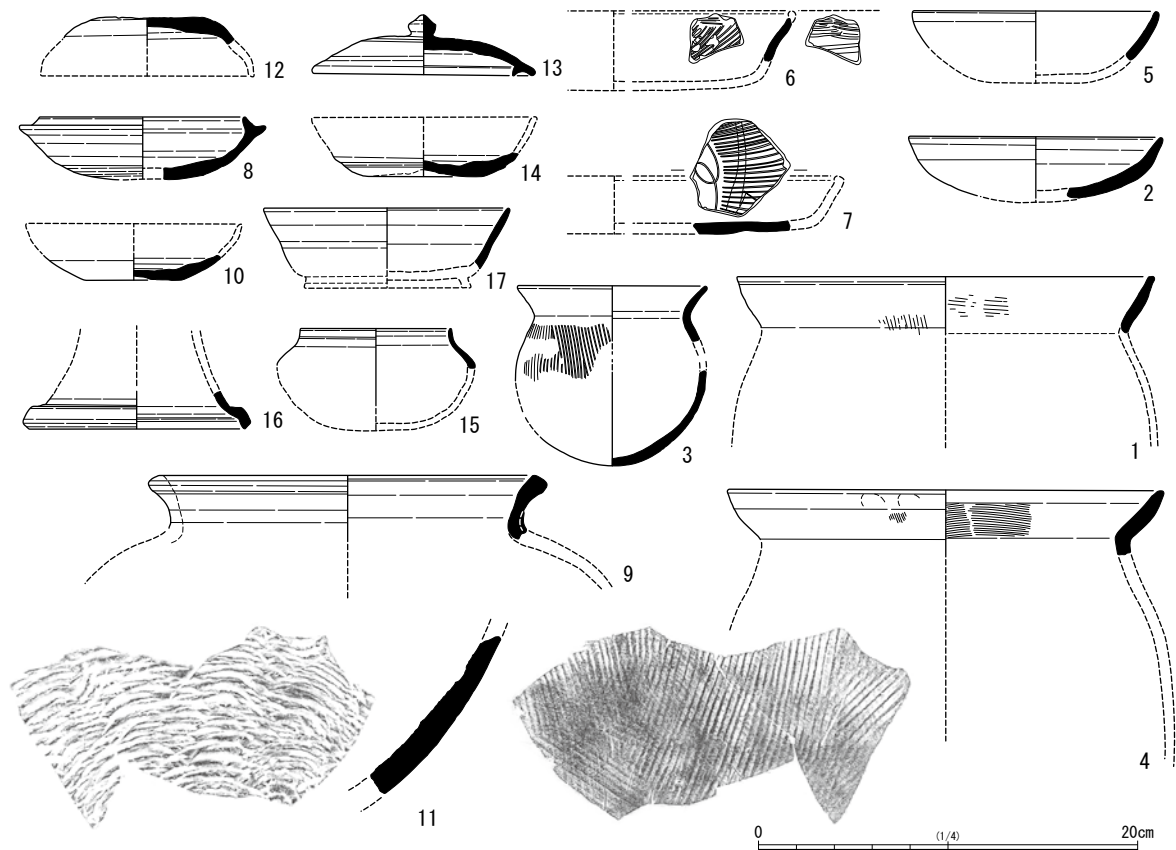
第16図は古墳時代後期～古代初頭(7世紀半ば以降～8世紀初頭)の土師器(1～7)、須



第14図 縄文土器 実測図



第15図 弥生土器 実測図



第 16 図 土師器・須恵器 実測図

恵器（8～16）をまとめて掲載した。12は坏H蓋、8は坏H身、10・14はローカルな坏A、13は坏G蓋、17は坏B身である。これらの中では17の坏B身が7世紀末～8世紀初頭と見ておく。15はかなり小型化が進んだ短頸壺であり、7世紀後葉～8世紀初頭頃と見てよいだろう。16は台付坏の脚であり、6世紀末～7世紀の幅には収まる。3は小振りの甕の口縁であり、11は中型甕の体部片であり、外面は平行タタキ、内面は青海波タタキの当て具痕が付く。すべて畿内（陶邑）系の須恵器であり、7世紀中葉～8世紀初頭頃に収まる。5は埴Cのローカル類品、2は坏Cのローカル類品であり、7世紀末～8世紀前半ば頃のものともみるか。6は斜放射の暗文や外面にヘラミガキが認められる坏Aである。7は内面に放射暗文と連弧状暗文が確認できる皿Aである。6・7は7世紀末～8世紀初め頃の内に位置づけられる。1・4は受け口状の口縁を持つ長胴甕の口縁部である。両者とも口縁部内面にハケ目痕が認められる。受け口状口縁部の形式的特徴は山城から近江南半に一般的によくみられる両地域で共通する長胴甕の口縁部の特徴を有している。3の小型甕は、先の両地域において受け口状口縁の長胴甕との共伴例が一般的に認められる。両者ともに7世紀後半～8世紀初頭の時間幅に位置づけて問題ないだろう。

第 1 表 出土遺物観察表

標図番号 掲載番号	図版 番号	地区・遺構 層位	種類・器形 (型式名)	法 量 (口径φ・器高H 残存値には残)	色 調	胎 土 粗・密や含まれる岩石・底物の 大きさφ ※mm以下など)と量	焼 成	残 存 率 口縁※% など	備 考
第14図 1		第2区 南半 遺構検出時	縄文土器 深鉢 尖り底(突底)	— (残H5.7)	外面 にぶい黄橙色 内面 灰黄褐色	密 細かい砂粒を含む	やや良	不明	爪形文
第14図 2		第2区 南半 遺構検出時	縄文土器か 深鉢か	— (残H5.5)	にぶい黄褐色・ 灰黄褐色	密 1mm以下の砂粒を多めに含む	良	不明	削り風痕跡か
第15図 1	12	P2	弥生土器 壺	(復φ16.0) (残H2.4)	にぶい黄褐色	やや密 2mm以下の砂粒を多く含む	良	口縁8%	
第15図 2	12	第2区 北半 重機掘削時 遺構面上	弥生土器 壺	(復φ8.4) (残H12.8)	にぶい黄褐色・明黄褐色	粗か 8mmの小石を含む 3mm以下の砂粒を多く含む	やや良	口縁20%	
第15図 3	12	第2区 北半 遺構面上	弥生土器 壺	(復φ10.5) (残H7.4)	明赤褐色	密 1mm以下の砂粒を含む	良	口縁20%	
第15図 4	12	土坑1	弥生土器 (低い) 壺(or甕)	(復底φ4.4) (残H1.2)	外面 にぶい黄褐色 内面 灰褐色 胎土 にぶい橙色・灰色	密 2mm以下の砂粒を多く含む	良	底部25%	
第15図 5	12	溝2	弥生土器 甕か	(復底φ4.0) (残H1.3)	外面 橙色 内面 褐灰色	やや密 4mmと3mmの砂粒を含む 赤色粒	良	底部5%	
第15図 6	12	落込み1	弥生土器 壺か	(復底φ4.8) (残H1.55)	にぶい赤褐色	密 2mm以下の砂粒を含む	良	底部40%	
第15図 7	12	第2区 北半 遺構面上	弥生土器 (低い) 台付甕	(推定底φ5.4) (残H3.6)	外面 浅黄褐色 底部 少し濃い 内面・底部 灰色	密 2mm以下の砂粒を含む	良	不明	
第15図 8	12	P3	弥生土器 小(ミニ) 鉢	(復φ5.7) (残H5.2) 底φ3.1	にぶい橙色	密 2mm以下の砂粒を含む	やや良	口縁45% 底部完形	
第15図 9	12	第2区 北半 遺構面上	弥生土器 小台付鉢	(推定φ10.8) (推定H5.2) (推定底φ8.5)	灰色 器表面一部 灰白色	密	やや良	不明	
第16図 1	12	建物1 礎石1	土師器 長胴甕	(復φ22.0) (残H3.0)	浅黄褐色 胎土の中心 灰色	密 2mm以下の砂粒を含む 3mmの赤色粒を含む	良	口縁4%	
第16図 2	12	建物4	土師器 坏(C)か	(復φ13.4) (残H3.2)	にぶい赤褐色	密	良	口縁11%	
第16図 3	12	建物4	土師器 (小) 甕	(復φ10.0) (推定H9.5)	外面 橙色・ にぶい黄褐色・黒色 内面 橙色	密 2mm以下の砂粒を含む 金雲母・赤色粒	やや良	口縁5%	スス付着
第16図 4	12	建物4	土師器 長胴甕	(復φ23.0) (残H3.4)	浅黄褐色 胎土の中心 灰色	やや密 2mm以下の砂粒を多く含む 金雲母	良	口縁5% (端部欠)	
第16図 5	12	第2区 南半 遺構検出時	土師器 埴(C)か	(復φ13.0) (残H2.6)	橙色	やや密 1mm以下の砂粒を多く含む	やや良	口縁12% (端部欠)	
第16図 6	12	第2区 南半 遺構検出時	土師器 坏A	(復φ19.2) (残H4.2)	橙色	密 1mm以下の砂粒を含む	良	不明	斜放射暗文
第16図 7	12	第2区 南半 遺構検出時	土師器 皿A	(復φ24.2) (残H3.1)	橙色	やや密 2mm以下の砂粒を多く含む	良	不明	放射暗文・連弧
第16図 8	12	P 8	須恵器 坏H身	(復φ13.0) H3.3	青灰色	やや密 3mm以下の砂粒を含む	良	口縁6%	
第16図 9	12	P 9	須恵器(瓦質) 甕	(復φ21.0) (残H3.35)	胎土 灰白色 器表面 灰色	やや密 3mmの砂粒を含む	良	口縁9%	
第16図 10	12	建物2 柱穴1	須恵器 坏A身(H蓋形)	(復底φ5.0) (残H1.3)	灰色	密 1mm以下の砂粒を含む 黒色粒	良	底部32%	
第16図 11	12	建物2 柱穴1	須恵器 甕	— (残H8.3)	淡黄色	やや密	不良 (焼きあま)	不明	擬格子目タタキ
第16図 12	12	建物3 柱穴11	須恵器 坏H蓋	(天井上面 復φ6.1) (残H1.4)	灰色 天井上面 灰白色	密 1mm以下の砂粒を含む	良	天井上面 30%	
第16図 13	12	建物4 遺構面上	須恵器 坏G蓋	φ11.8 H3.1	青灰色	やや密 5mm以下の砂粒を含む	やや良	口縁82%	
第16図 14	12	土坑1	須恵器 坏A身か	(復底φ6.4) (残H1.3)	灰色 内面は外面より少し濃い	密 2mm以下の砂粒を含む 4mmの黒色粒を含む	良	底部45%	
第16図 15	12	土坑1	須恵器 (小) 壺	(復φ8.0) (残H2.1)	灰白色	やや密 2mm以下の砂粒を多く含む	良	口縁6%	
第16図 16	12	第2区 南半 遺構検出時	須恵器 台付坏	(復底φ12.0) (残H2.0)	外面・口縁部 灰褐色 内面・外面体部 褐灰色	密	良	口縁10%	
第16図 17	12	土坑1	須恵器 坏B身	(復φ13.0) (残H3.2)	灰色 胎土 灰白色	密	良	口縁3%	

第5章 まとめ

今回の調査地は、中臣遺跡内で実施された最も平面規模の大きな（約1万㎡程）既調査である中臣79次調査地での南東隣地で小規模（175㎡程）調査であった。しかし、調査地東辺を南北に走り東へ落ちる河岸段丘崖を検出し、西部の2区では主に断丘崖の上位面、東側の1区では1.5m以上の比高差を持つ、東の現山科川方向へ下る下位面の一部を検出することが出来た。遺構は、主に段丘崖の上位面上で検出している。

弥生時代の関連資料は、新しい時期の遺構や包含層に混入する形で出土した土器類が主であり、遺構は確認出来なかった。弥生土器類では、壺・甕・鉢類等が中心であり、山科盆地を含む京都盆地東北部から滋賀県の南半部の琵琶湖周辺の低地部に広く展開している、弥生Ⅴ様式（～Ⅵ様式）に位置付けられる型式特徴を持つものが主体であった。出土状況は、混入品的であったが比較的残りの良いものも含まれており、大きな移動は受けていないようである。今は削平され、消失したものも多いようだが、上位面に形成されていた弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構に関連するものと見ている。

古墳時代前期後半から中期の遺構・遺物は検出出来なかったが、中臣遺跡の弥生時代後期に次ぐ盛期である古墳時代後期から古代初め頃の、遺構・遺物は一定量検出することが出来た。この時期の遺構は一周約10m程かと推定される小型方墳の周溝残欠かとも見られるL字形溝（状）遺構、竪穴式住居址（建物4）の南東の2辺1角及び1柱穴、小倉庫と見ている2間×2間の小型の総柱建物（建物2・3）などである。今回の調査地だけでは、集落の一角を成すことしか言えないが、北側の中臣79次調査地では、類似するこの時期の竪穴住居址や関連するだろう総柱の小建物が全面に展開している。今回の調査成果は、大規模集落が当調査地を含んだ南東地域にまで、さらに広がっていた事を示している。東側の段丘崖の下位面の既調査地でも、この時期の建物を主とした遺構が広がっていた事が明らかになっている。時期は限定的のようだが、かなり大規模な集落址であり、中臣氏・藤原氏を考えていく上でも、まとめた形での整理研究が望まれる。

今回の調査において、出土した土師器・須恵器は、中臣遺跡が7世紀第3四半期から同第4四半期頃に盛期があった事をよく示す遺物類であると見てよいだろう。7世紀半ば頃から7世紀末の畿内の土師器・須恵器の既存の土器編年は現状研究が下火であり、検討の余地がある。このような既編年にとらわれず、ゆったりとした論理的に整合的理解を持てれば中臣遺跡の最盛期が中臣鎌足の活躍していた7世紀後半代に中心があると理解出来る。古墳時代末期から古代初頃がこのように見られても、弥生時代後期から古墳時代初頭と、この古墳時代末期から古代初頭を中心とする2～3世紀も離れた短期間の2時期にしか盛期をもたない中臣遺跡の特性を明らかにし得ない。山科盆地内でもこの中臣遺跡だけだろう、不連続に重なった遺跡の関係をぜひ理解したいところである。

圖 版



1. 調査前風景 南西から



2. 調査前風景（河岸段丘崖） 南東から



3. 調査区全景（第1調査区西半～第2調査区） 北東から



4. 第2調査区南半・遺構検出状況 北東から



5. 第2調査区北半・遺構検出状況 南東から



6. 第2調査区全景 南東から



7. 第2調査区全景 北から



8. 建物 2 ・土層堆積状況 北西から



9. 建物 2 ・完掘状況 西から



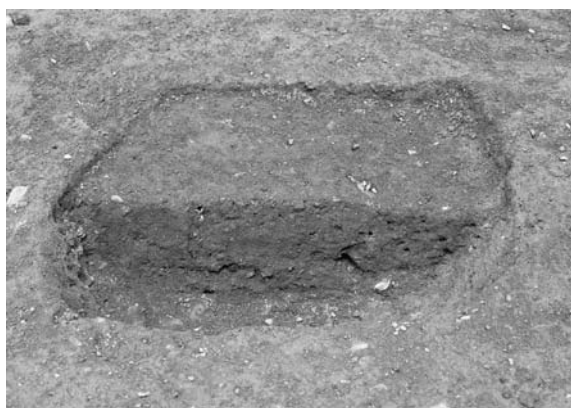
10. 第2調査区南半・遺構掘り下げ状況 北東から



11. 建物3・土層堆積状況 北西から



12. 建物3・土層堆積状況 北西から



13. 土坑2・土層堆積状況 南から



14. 建物1・掘り下げ状況 南西から



15. 第2調査区南半・遺構掘り下げ状況 北西から



16. 建物4・土層堆積状況 北東から



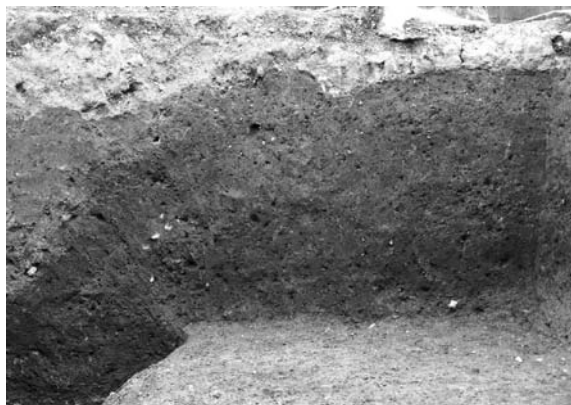
17. 建物4・掘り下げ状況 北東から



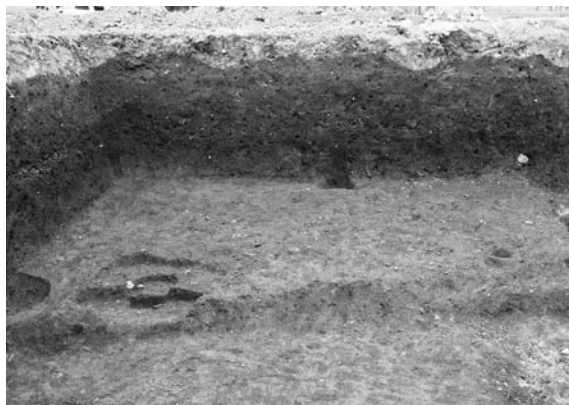
18. 建物3・完掘状況 北東から



19. 第2調査区拡張区・調査状況 北東から



20. 調査区南壁・土層堆積状況 北から



21. 第2調査区拡張区・遺構土層堆積状況 東から



22. 調査区南壁・土層堆積状況 北から



23. 調査区西壁・南端土層堆積状況 東から



24. 調査区西壁、中央南半・土層堆積状況 東から



25. 調査区西壁、中央北半・土層堆積状況 東から



26. 調査区西壁・北端土層堆積状況 南東から



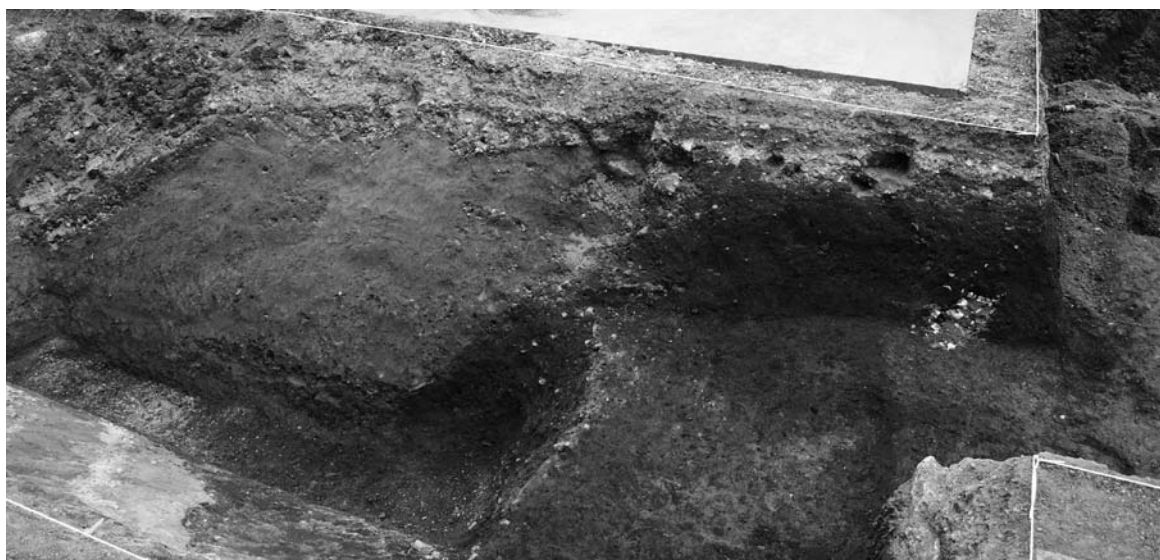
27. 第2調査区北壁・土層堆積状況 南から



28. 第2調査区北壁・土層堆積状況（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩） 南から



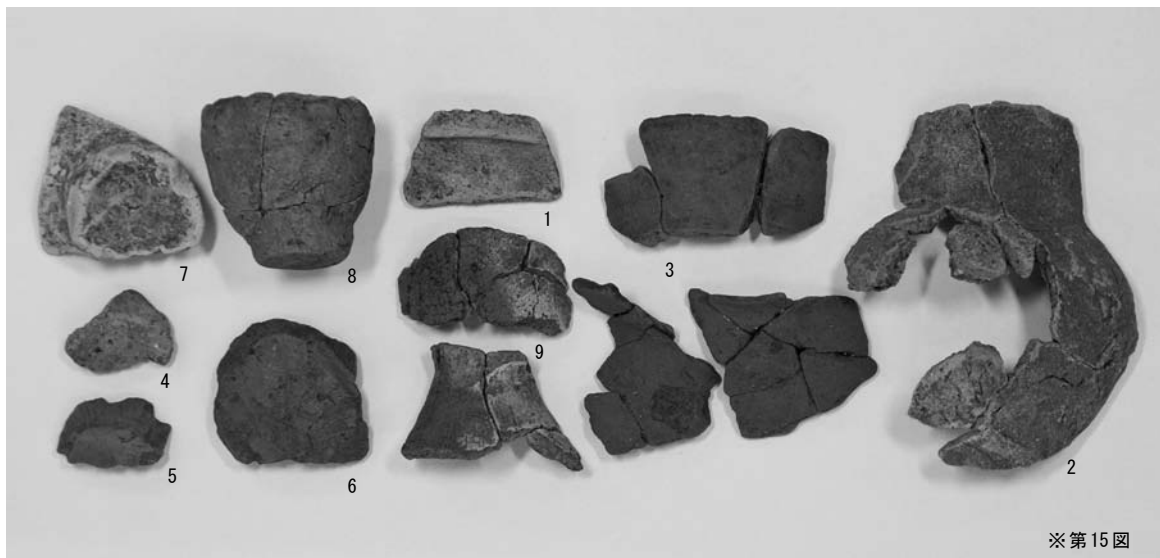
29. 第1調査区北壁・土層堆積状況（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩） 南東から



30. 第1調査区南壁・西半土層堆積状況（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩） 北東から

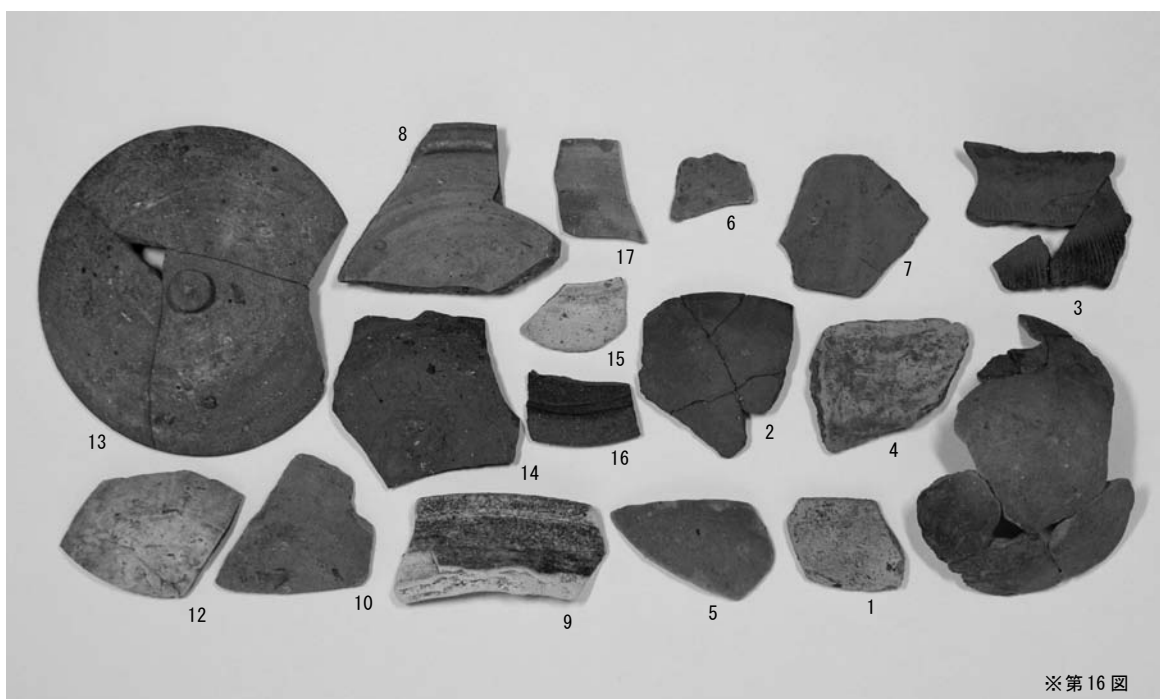


31. 第2調査区南壁・東半土層堆積状況（東へ落ちる河岸段丘、東面崖西肩） 北から



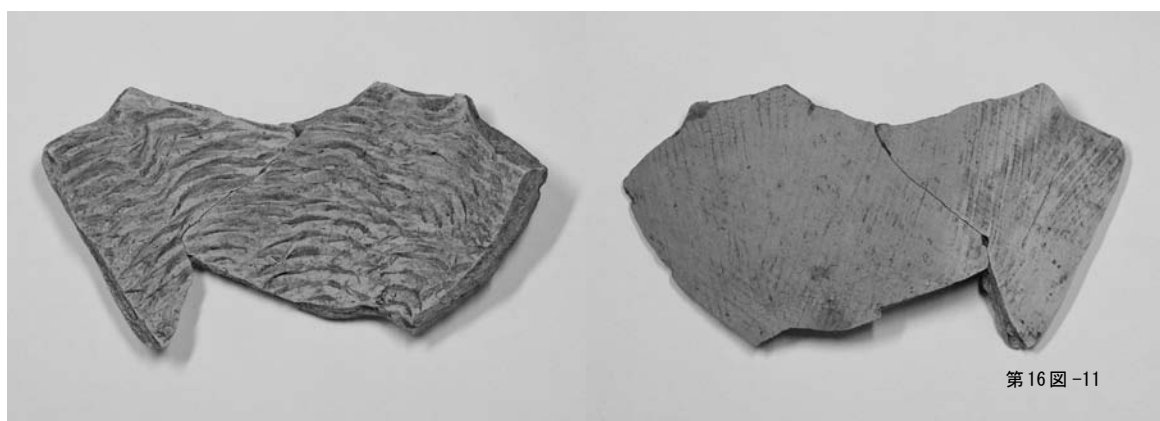
※第15図

1. 弥生土器



※第16図

2. 土師器・須恵器



第16図-11

3. 須恵器（甕）

報告書抄録

ふ り が な	きょうとしやましなく なかとみいせきだい 93 じはっくつちようさほうこくしょ							
書 名	京都市山科区 中臣遺跡 第 93 次発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	京都平安文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第 9 集							
編 著 者 名	中村吉孝・小森俊寛							
編 集 機 関	有限会社 京都平安文化財							
所 在 地	〒 612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4							
発 行 年 月 日	2020 年 2 月 25 日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
なかとみいせき 中臣遺跡	きょうとしやましなくかんしゅうじひがし 京都市山科区勸修寺東 くりすのちよう なぎつじばんしよが 栗栖野町、柳辻番所ヶ ぐちちよう 口町	26110	632	34 度 58 分 10 秒	135 度 48 分 19 秒	2019 年 7 月 29 日 ～ 2019 年 9 月 4 日	175m ²	宅地造成
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
中臣遺跡	集落跡	古墳時代 後期 飛鳥時代 古代前半 近世以降	河岸段丘崖 古墳周溝 残欠か 竪穴建物、 掘立建物、 土坑、溝 礎石建物、 溝	須恵器・坏蓋・甕・土師器 甕（長胴か）				
要 約	調査地は山科川の河岸段丘上に立地する遺跡で、古墳時代後期から 8 世紀の竪穴住居址や掘立柱建物 が確認されたが、周辺の調査状況からは段丘崖上位面から展開してくる同時期の集落跡の一連の広が りの中であらえられるものである。							

令和二年（2020 年）2 月 25 日発行

京都市 山科区

中臣遺跡 第 93 次発掘調査報告書

（京都平安文化財発掘調査報告 第 9 集）

編集 有限会社京都平安文化財

〒 612-8018 京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4

電話 075-644-6600

印刷 あおぞら印刷株式会社

〒 604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15

電話 075-813-3350

